

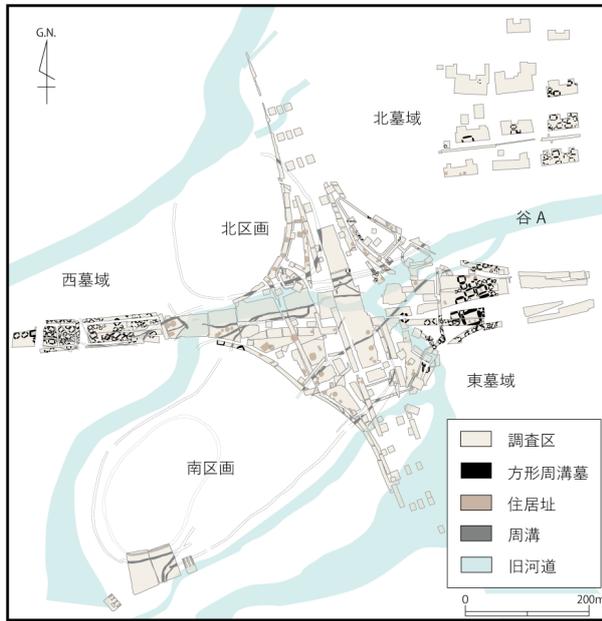
パレススタイル壺に描かれた弥生時代の暦

東海大学文学部 北條芳隆

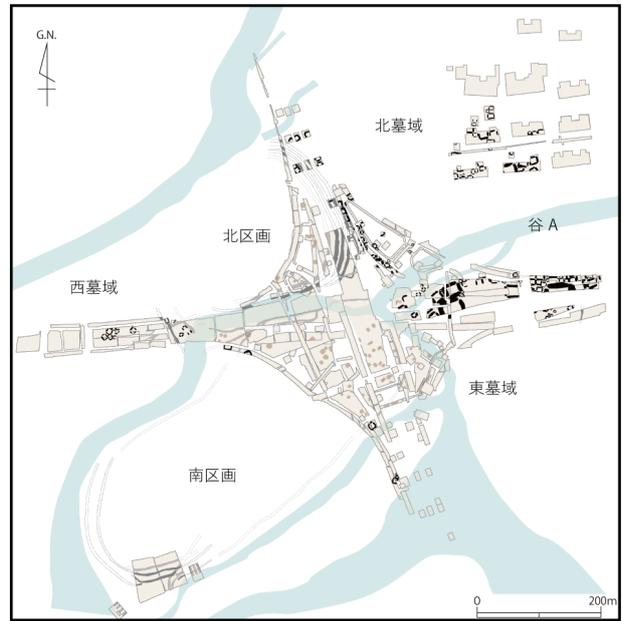
1. 赤黒円文パレス壺の発見

今回紹介するのは、朝日遺跡出土のパレススタイル壺の1点である。赤黒円文パレス壺と仮称するこの壺の写真に接し、そこに描かれた円文は太陽や月の描写ではないかと最初に気づいたのは東海大学博士課程（文明研究所特定助手）の白川美冬であった。その写真を見せられた私も、この壺の構図はたしかに弥生時代の暦を表す可能性が高いと予感した。急ぎ原田幹氏に依頼し、詳細な観察をさせていただいた。

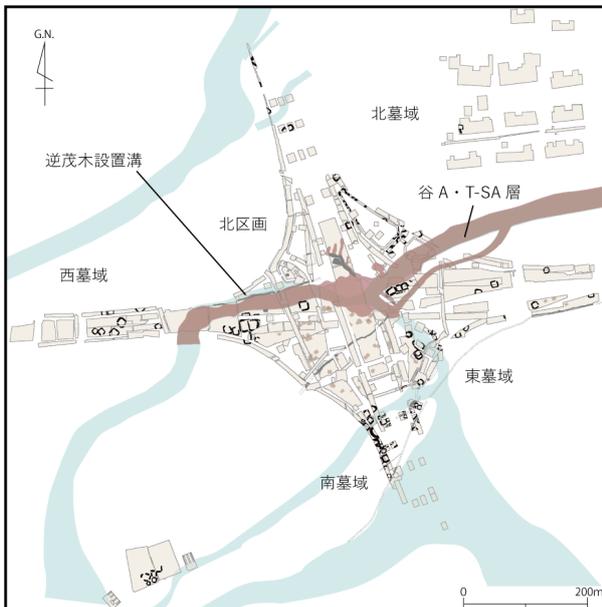
調査結果は私たちの予想どおりだったのであるが、前段階の作業として、この赤黒円文壺が出現するまでの背景を整理しておく必要がある。そこで白川は、朝日遺跡出土の赤彩円文を再点検する作業に着手した。集落動態や社会情勢との関連性において、赤彩円文や太陽への意味づけを解明するためである。というのも、朝日遺跡から検出された方形周溝墓600余基を含めた埋葬方位の変遷は、年間の太陽の出没範囲との関連性に沿って把握できることを、彼女はすでに突き止めていたからである（白川2023aほか）。こうした経緯もあったため、2024年1月末の現時点において、基礎作業はおおむね完了した。今回提示する図面の多くも白川作成であり、記述内容の一部も彼女の所見を転記させて頂く。



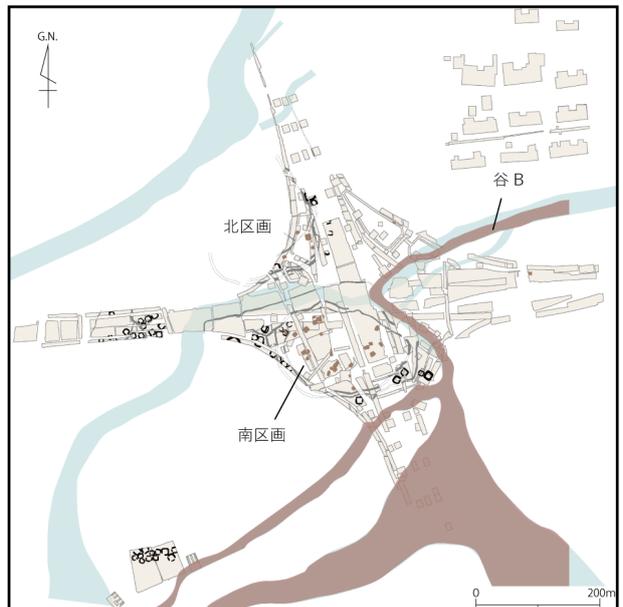
弥生時代中期前葉（様相1）



弥生時代中期中葉（様相1）



弥生時代中期後葉（様相2）



弥生時代後期前半（様相3）

表1 朝日遺跡の集落動態（前頁の変遷図・図1と対応）

	様相1					様相2		様相3	
時期	中期前葉 (B.C.4前半)		中期中葉 (B.C.4後半～B.C.3)			中期後葉 (B.C.3末～B.C.1)		後期前半(B.C.1末～)	
編年	朝日式1期	朝日式2期	貝田町式1期	貝田町式2期	貝田町式3期	貝田町式3期	高蔵式期	八王子古宮式期	山中1式期
気候	温暖乾燥期							寒冷湿潤期	
集落	南北に居住域 南区画内に区画溝		住居プランが円から方へ 居住域内の区画消滅			環濠の消滅 (周辺集落数増加)		環濠復活 (規模縮小)	
墓地	西墓域形成 等質・放射状	東墓域形成 大型有・列状	集落東側へ墓域が収斂			墓域が不明瞭に		集落周辺・西側に墓域形成	
	長方形墓・四隅陸橋型が主体					正方形墓の増加・陸橋の多様化		SZ132造営	(環濠掘削)
円窓付土器			中期中葉(貝田町式)			中期後葉(高蔵式)		…(ほぼ消滅)	完全消滅
筒形土製品			中期(貝田町式)			後期前半(八王子古宮式)			
台盤状土製品			中期中葉(貝田町式1期)			中期後葉(高蔵式)		…(ほぼ消滅)	
台付甕					中期中葉(貝田町式3古)			古墳時代	
鳥形土製品						中期末(高蔵式)		後期前半(山中1)	
凹線文系土器						中期後葉(貝田町式3新)		後期前半	
パレススタイル								後期初頭	古墳時代

一方の私も、佐賀県吉野ヶ里遺跡北内郭における「高い月」の祭祀の問題や、中国大陸から導入された弥生時代の日の出暦の問題を追究中であつた(北條2022)。同時代の中国の暦からの部分借用が弥生時代の終末期には認められるので、そこでの知見と白川の整理を踏まえ、この赤黒円文壺の構図を検討する。

朝日遺跡の集落景観変遷については図1と表1に示している。白川は様相1から様相3までに区分しているので、以下の表記もそれに従う。パレススタイル土器群は様相3の弥生時代後期前半に出現した。問題の赤黒円文壺もこの時期のものである。以下、2や3の記述内容の骨格は白川提供であることをご承知おきいただきたい。

2. 赤黒円文パレス壺の出土状況

赤黒円文パレス壺は、表1に示した様相3の段階、集落復興期にあたる後期前半の遺物である。2004年に実施された事前調査の時点で、溝状遺構SD02から出土した(赤塚2009-54頁)。図2に示すSD02は、深さ1.72m、溝幅2.83mの溝で、北区画南側の谷A右岸の後期内環濠SD03と後期外環濠SD01が北区画内側に向かってコの字に屈曲する特異空間の南側に位置する。このSD02からは、山中I式期を中心とする土器や木製品が集中的に出土しており、掘削時期は八王子古宮式の新段階から山中I式初頭段階と推定される。問題の赤黒円文壺は山中I式前半に帰属する(早野2009-60頁)。

この段階における北区画は祭祀空間であつたと推定され、このエリア内からは特殊な方形周溝墓SZ132が検出された。朝日遺跡では620基以上の方形周溝墓が知られるが、環濠内に築造されたのはSZ132だけである。ここからは大量の

山中式土器が発見された。しかもその墳丘主軸は夏至の日の出と冬至の日の入方位に向けられた(白川2023a-13頁)。

SZ132は八王子古宮式2期、SZ132の南周溝と隣接する環濠SD03は山中I式に掘削されたと推定され、SZ132が環濠の掘削に先行する(宮腰2011-153頁)。つまりこの墳丘軸線は環濠に規定されたのではない。むしろ逆であり、SZ132が環濠内の祭祀空間に組み込まれた特異な存在であることを考慮すれば、その軸線設定が意思的な選択であつたことに疑問の余地はない。



図2 赤黒円文パレス壺の出土地点

しかも太陽の出没位置に基づく埋葬方位の設定は、様相1の後半に築造された大型方形周溝墓で積極的に採用された。正方形墓つまり特定方向への志向性を見えにくくする墓制が主流となった様相3の段階に、あえて長方形墓を選択SZ132の様相は、いわば復古的思想にもとづく営為であったと白川は考えている。

なお直接視認できたか否かは不明であるが、SZ132からみた冬至の日の出方向に、赤黒円文パレス壺が置かれた点は留意すべきであろう。

3. 赤黒円文パレス壺の概要と系譜

問題の壺を口縁部直上から俯瞰したものが図3である。壺の基本モチーフは頸部と胴部を全周する2条の赤色帯と、それに挟まれるかたちで胴部上半に描かれた赤と黒の円文列、そしてその上段に描かれた一つの赤彩円文で構成されている。また円文列を詳細に観察すると、同色同土を隣接させることはなく、ほぼ等間隔で赤彩円文と黒彩円文が配されている。壺の欠損箇所も同様であったと推定できるから、赤彩円文12個と黒彩円文12個からなるデザインとして復元できる。

各円文のサイズを計測したものが表2である。完全な状態で遺存する赤彩円文と黒彩円文の平均値を比較すると、赤彩円文の平均が2.8×3.1 cmであるのに対し、黒彩円文の平均は2.0×2.4 cmである。隣接する円文同士を比較しても、黒彩円文が小さく描かれたことは明らかである。したがって赤黒円文パレス壺には、赤彩円文を黒彩円文より大きく描く明確なルールが存在したと考えられる。

では赤彩円文の系譜を述べる。朝日遺跡出土例を対象に、弥生時代後期前半以前に帰属する赤彩円文を有するパレススタイル土器群を時期別に集めたものが図4である。赤彩円文は高蔵期に誕生し、八王子古宮式から山中I式I段階にかけて多様な器種に採用されたのち、次第に壺へと収斂された。

一部の高坏や壺では内面への赤彩円文の描写が認められるが、基本的には胴部あるいは坏部上半や口縁部など目立つ場所に施される場合が多い。視認性重視の赤彩円文だといってもよいだろう。

初現期の様相を示す事例としては、高蔵式期の壺1点が注目される(図4,887番)。この壺は明らかに古相的な様相をとどめている。この伝統的なフォルムを呈する壺の胴部に最初の赤彩

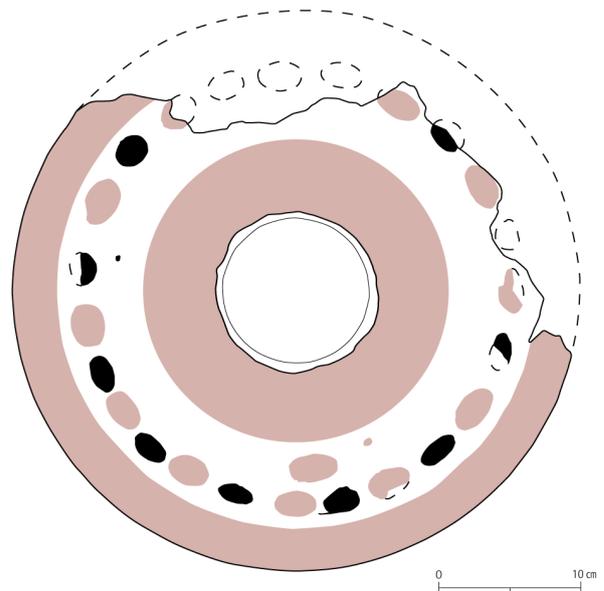


図3 赤黒円文パレス壺の基本デザイン

表2 赤彩円文と黒彩円文のサイズ比較
(番号は上図の最下段から反時計回り)

	赤彩円文		黒彩円文	
	縦(cm)	横(cm)	縦(cm)	横(cm)
1-上段	2.8	3.9		
1-下段	2.7	2.85	1.65	2.3
2	2.7	3.1	1.95	2.7
3	2.6	3.3	2.5(現存)	1.3(現存)
4	2.3(現存)	2.5(現存)	欠損	欠損
5	2.7	3.2	2.0	2.4
6	2.1(現存)	3.0(現存)	欠損	欠損
7	欠損	欠損	欠損	欠損
8	3.0(現存)	0.8(現存)	2.3	2.2
9	3.1	3.4	1.3(現存)	2.3
10	2.9	2.9	2.15	2.5
11	3.0	2.9	2.1	2.5
12	3.0	2.8	2.1	2.5
完存数	9	9	7	8
完存下段平均値	2.8	3.1	2.0	2.4

円文が付加された事実は見逃せない。高蔵式期は在来の伝統が崩壊し、外来の凹線文系土器へと移行する変革の時期であった。その段階に古い形を踏襲する細頸壺が作られたのだから、それは新たな潮流に抗う土器とみなすべきだと白川は考えている。そのような壺に付加された赤彩円文なので、そこにも古相文化を表象する意図が込められた可能性がある。では古相文化の表象とはなにか。太陽である。

様相1の後半、東墓域では大型方形周溝墓が造営され、太陽の出没位置を意識した埋葬方位が選択された(白川2024)。この遺跡は東西文化が交わる要所であり、日常的・定期的な諸々の交換の舞台でもあったから、大型方形周溝墓の被葬者は“日知り”や“月読み”と呼ばれた時を司る人物であった可能性が指摘できる。さらに墓域が集落の東側へと収斂され

る様相1の後半には、太陽の出没位置を意識した埋葬が人々にも広く受容された。以上の集落景観変遷を概観すれば、様相1の段階において集団統合のシンボルとして重視された太陽が、赤彩円文の源流であった可能性を指摘できる、という次第である。私も白川の見解には説得力があると考えている。

4. 赤黒円文パレス壺の解釈

(1) 上段は冬至の太陽

では問題の赤黒円文パレス壺の構図とその意味を考える。上述のとおり赤彩円文は太陽の描写であると理解される。ただし上段に1個、下段にも12個の赤彩円文が配されているため、まず上段と下段の配列関係を押さえる必要がある。この点については、上段が指標としての意味をもち、下段の列はそれを

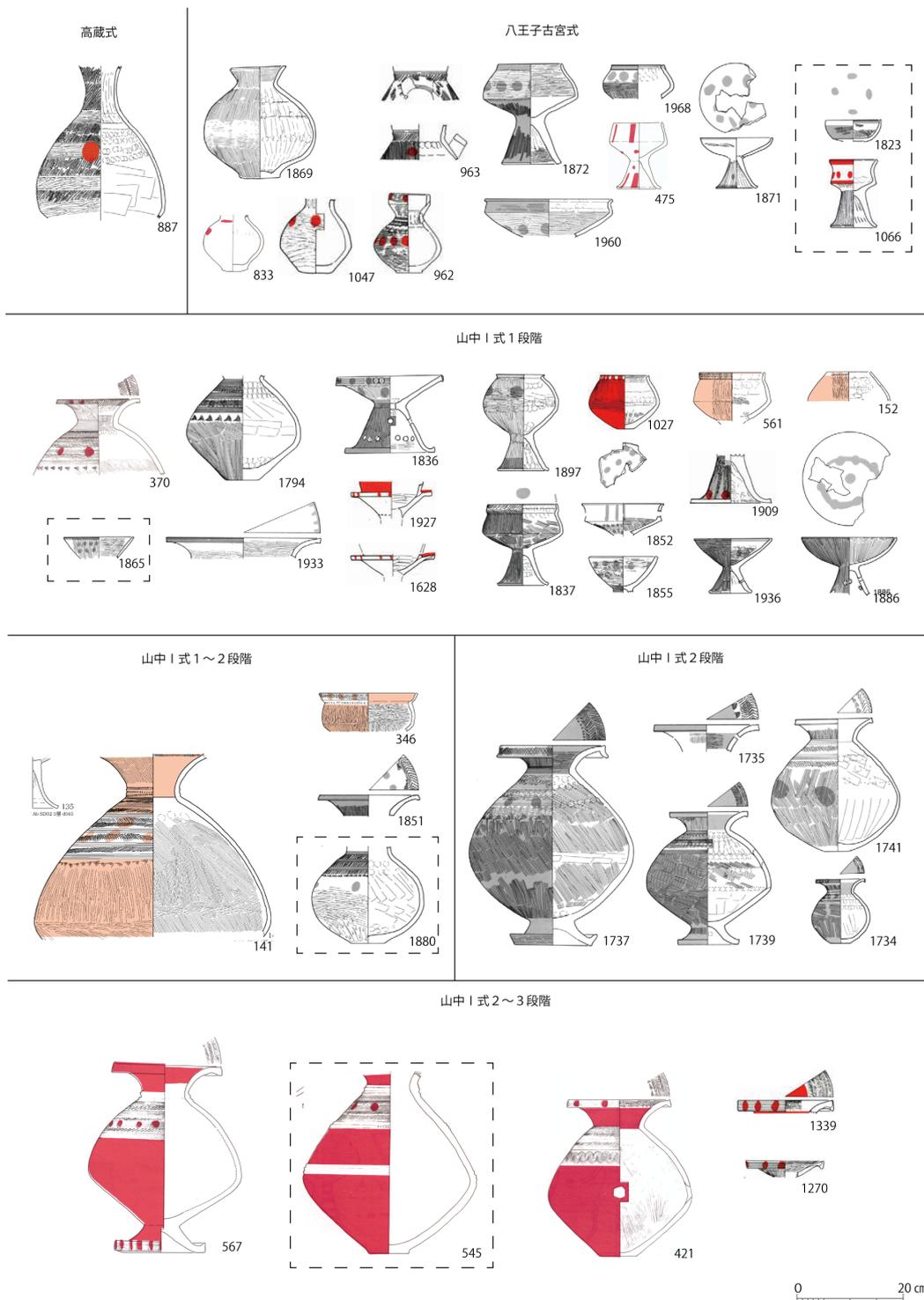


図4 朝日遺跡における赤彩円文土器集成

基準に展開する構図だとみる。では上段の赤彩円文は何を表すのであろうか。最有力候補は冬至の太陽である。冬至は日の出の南限にあたり、年間をつうじて南中高度が最も低く日照時間も最短となる。だから冬至は陽光の力が弱体化した状態だと知覚され世界各地で祭祀の対象ともなったし1年の終点とも起点ともされてきた。古代中国でも甲骨文に記録が残る殷代以降、冬至は暦を策定するうえでの基本指標とされた。朝日遺跡においてもSZ132で冬至の日没が重視された形跡がある。

もとより年間の太陽の出没を定点観察しさえすれば、冬至は夏至と共に容易に認知されうる年間の節目であった。ただし朝日遺跡の人びとが認知したのは、おそらく太陽の出没地点が南限に達した情景であり、天文学的な意味での冬至ではなかったと考えられる。太陽の出没が南限に近づくと、冬至点通過日より数日前から、その地点は見かけ上停止する。通過後も同様である。私はこの間の太陽を総称して冬至の太陽と呼ぶ。現在のグレゴリオ暦で表記すれば、およそ12月18日から26日までの合計9日間を指す。なお温帯モンスーン地帯に属する日本列島の場合、梅雨期でもある夏至の太陽が観察できる確率は低く、一方の冬至の太陽は出没ともに観察が比較的容易である。だから上段の赤彩円文は冬至の太陽を表すものであり、下段の配列を規定する指標だと理解されるのである。

(2) 太陰暦の可能性

では下段に描かれた24個の赤黒円文はどうか。12個の赤彩円文と12個の黒彩円文が配される構図なので、これは1年間を表現したものであろうと直ちに推測される。とはいえ暦の歴史を念頭におけば、次の2案を検討する必要がある。

その第1案は「二十四節気」に沿って15.2日間隔で年間を24等分する太陽暦だとする解釈である。表1に該当させれば、下段1の赤丸が十一月節の大雪で、黒丸が十一月中の冬至となり、以下、反時計回りに下段2の赤丸が十二月節の小寒で黒丸が同中気の大寒を表す、ということになる。しかしこの案では、黒彩円文が赤彩円文より明らかに小さく描き分けられる事実を説明できない。さらに最大の難点は、上段の赤彩円文との配列上の整合性がとれないことである。冬至の太陽は十一月中気を含むので、その直下に黒彩円文が配されなければならな

い。しかし実態はそうではない。赤彩円文と黒彩円文の中間の位置にある。以上の問題点があるため第1案は破棄される。

対する第2案は、月の満ち欠け、つまり一朔望月に沿った太陰暦を描くものだとする解釈である。12個の赤彩円文は満月、12個の黒彩円文は新月であり、両者を合計すれば12朔望月となる。この案では黒彩円文を新月すなわち夕暮れ時であっても月が全く見えない状態を想定する点で、現実の情景とも親和性をもつ。全周で12朔望月なので、概ね354日間の月の満ち欠けを合計した時間の経過を表すものとなり、それによって1年間を表したとする案である。

暦の歴史に照らしても、太陰暦は最も古く登場した暦の枠組だといわれる。そのため中国や朝鮮半島など外部世界からもたらされる知識がなくとも、朝日遺跡で独自に組み上げられた暦の可能性が指摘できる点でも有望である。なおこの場合、上段の赤彩円文を冬至の太陽だと解釈する一方、下段の赤彩円文を太陽ではなく満月とみなすことの妥当性が問われるだろう。ただし古代中国でも太陽と月とが同列に配された事例が参考になる。つまり昼の太陽と夜の満月とが同等視された事例が存在する以上、下段の赤彩円文を満月とする案は十分に成立しうるのである。

(3) 太陰暦とみた場合の問題点

なお本例が太陰暦であるとみた場合の問題点は、1太陽年と12朔望月との間にみる日数の隔たりである。前者が365日余であるのに対し、後者は354日余で、後者は前者より約11日短い。

ただしこの問題については、太陰暦を基準としつつも上段の冬至の太陽を指標とする格好で太陽暦との整合性にも配慮される暦であった可能性を考えたい。すでに触れたように、上段の赤彩円文は下段の赤彩円文と黒彩円文の中間に置かれているので、この位置を選択することによって、冬至の太陽が満月に近い日取りとなる場合もあれば、新月に近い日取りとなる場合もあることを表したといえるのではなかろうか。

冬至の前後9日間は太陽の出没地点が見かけ上停止する。この現象を利用し11日間余のずれを解消した可能性を考える。たとえば前年の冬至が満月だった場合、12回目の満月は12月12日頃となる。5日後には冬至の太陽の期間に入る。下弦の月は12月20日頃なので、その翌朝を次の年初とする、といったような運用である。その期間内で年初を再設定するので、1年の日数は不定となるが、閏月を入れ込

む必要はなく、冬至の太陽を基準に暦月は毎年リセットされるので、長期安定的な太陰（太陽）暦となる。こうした弥生文化独自の暦システムであった可能性である（北條2022-297頁）。以上の検討結果から、本例の構図は第二案が妥当だと考える。

（4）SZ132との関係

この問題と関連するのがSD02の近隣に造営されたSZ132の軸線である。この遺構の軸線は夏至の日の出と冬至の日の入り方位を示すが、夏至ではなく冬至の日没が重視されたとみるべきである。その理由は冬至の太陽の期間に満月が到来したとき、きわめて印象深い情景がこの遺構上から視認されるからである。

その一例を〈ステラナビゲーター.ver11〉に依拠しつつ再現したものが図5である。紀元後55年12月23日（ユリウス暦表記）はこの年の冬至点通過日であり、当日が満月であった。太陽は武平峠の北斜面に沈むが、日没後にはちょうど反対側、つまり夏至の日の出側の正面から満月が昇ったのである。この晩の満月の出現点と夏至の太陽の出現点とは 0.2° の誤差しかない。同じ情景は19年ごとに立ち現れた。

さらにこのタイミングを含め、冬至の太陽の期間に満月が到来するのは、9.3年周期で繰り返される「高い月」と「低い月」のそれぞれに2回ずつある。つまり19年に4回は図5と酷似する情景がSZ132から視認されたのであり、祭祀を演出

する効果は抜群であったはずである。むしろこの情景を狙ったうえで催行された、沈む太陽と昇る満月の双方に向けた祭祀であった可能性も高いとみるべきではなかろうか。

SZ132の軸線がもつ意味は、赤黒円文パレス壺の構図を読み解くうえでも重要である。上段の赤彩円文が冬至の太陽を表し、下段のそれは満月であったとする私の見解を傍証する再現情景だといえよう。

【引用文献】

- ・赤塚次郎2009『朝日遺跡8』本文編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書154
- ・白川美冬2023a「埋葬方位研究の行く末」『考古天文学と古代の景観』しだみゆー歴史講演会「寺子屋」講演資料 2-17頁
- ・白川美冬2023b「埋葬施設と太陽」『考古天文学と大和の景観』奈良女子大学けいはんな公開講座 講演資料 1-10頁
- ・白川美冬2024「朝日遺跡埋葬方位考」『あいち朝日遺跡ミュージアム研究紀要』03、あいち朝日遺跡ミュージアム(受理済・掲載頁未定)
- ・早野浩二2009「弥生後期」『朝日遺跡8』総集編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書154 60-63頁
- ・北條芳隆2022「吉野ヶ里遺跡の祭祀と北限の満月」『モノ・コト・コトバの人類史—総合人類学の探究—』後藤明先生退職記念論文集 雄山閣 285-299頁
- ・宮腰健司2011「墳墓の様相と地域性—濃尾平野・名古屋台地—」『伊勢湾岸域の後期弥生社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・後期篇 伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト 153-161頁

西暦55年12月23日冬至の日の入りと満月の出 (日の入方位と月の出方位における 180° からの誤差 1.6°)

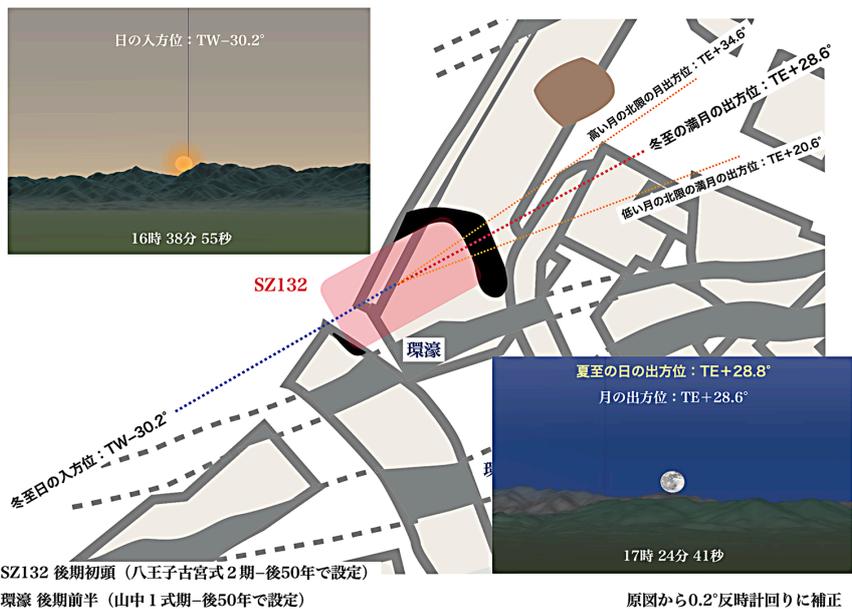


図5 SZ132から見た冬至の日没と直後の満月の出